

丸善工業株式会社 取締役会長 静岡県中小企業団体中央会 会長

諏訪部敏之氏

Toshiyuki Suwabe

小型建設機械のパイオニア 技術力と創造力で 世界に広がる"マルゼン"ブランド

小型建設機械メーカーの丸善工業(株)は、海外でも"maru zen"としてその名を知られる。技術対応力を武器に、 事業領域を小型油圧建機から自動車用検査機器、梱包・ 包装機械、健康・医療機器などに拡大してきた。静岡県 中小企業団体中央会会長も務める諏訪部会長に、同社の 戦略や中小企業活性化の考えを伺った。

(聞き手 当所 常務理事 大石人士)

### 小型油圧建機のパイオニア 技術力を活かし多角化を図る

# ─御社の事業概要についてお 聞かせください。

当社は、工事現場で使われる 建設機械を主に製造していま す。携帯型の削岩機や杭打ち 機、ミニショベルに取り付けて 使うアタッチメントなど、小型 建機を得意としており、災害対 策用に自衛隊や警察などでも使 われています。

輸出にも早くから取り組み、 欧米諸国はもちろん、酷寒の南 極から猛暑のアラブ・アフリカ 諸国、3,000m級の南米の高地 まで、当社の建機は世界各国で 使用されています。

小型建機の動力は空圧式が主 流ですが、当社は国内で唯一油 圧式です。これにより、強力・ 小型・軽量という性能を実現、 こうした点を世界各国で評価い ただいています。

# -他社との差別化が上手くで きていますね。

当社がエンジンを使った油圧 式建機を扱う理由は、その起源 にあります。昭和10年に父が 東京で機械部品の加工工場を興

し、その後、三島に移り航空機 のエンジン部品を製造、戦後は 経済復興に伴って爆発的に需要 が高まったオートバイの製造に 参入しました。「ミシマ」ブラン ドを冠したオートバイはオート レースで優勝、最盛期の生産台 数は1万台を超えたこともあり ました。

しかし、過当競争などを背景 に昭和29年に倒産、途方に暮 れる中、イギリスの会社から 「エンジン技術を使って削岩機 を作らないか」という提案があ りました。これを受けて、親戚 中駆け回り資金を集めて現在の 会社を設立、製品開発に取り組 み、同年には携帯用削岩機の国 産第1号を完成、販売を開始し ました。

最初は売れませんでしたが、 昭和33年の狩野川台風による 被害からの復旧工事に伴う建機 特需で息をつなぎ、その後は高 度経済成長の波に乗って拡大す ることができました。余談です が、昭和44年の東大安田講堂 事件で機動隊が壁を壊すために 使ったのも当社の削岩機でし た。

#### profile

昭和12年生まれ。早稲田大学 卒業後、丸善工業㈱入社。平 成2年に代表取締役社長に就 任、平成20年に会長となり現 在に至る。静岡県中小企業団 体中央会会長のほか、静岡県 発明協会代表理事、静岡県産 業成長戦略会議委員などの要 職も務める。

# 他にも多角的に事業を展開 されています。

私どもは、オートバイでの失 敗から、一事業当りの売上比率 を分散しリスク回避することの 重要性を学びました。また、建 機需要は季節変動が大きく、数 年に一度、建設不況にも見舞わ れますので、事業の柱を増やす ことに注力してきました。

まず1つめは、自動車用検査 機器です。車検機器などの製造 会社に勤務する父の友人から話 をいただいたのをきっかけに、 昭和40年より手掛けています。 国の検査は厳しく高い精度が要 求されますが、持ち前のチャレ ンジ精神で対応してきました。 今では、国内外の自動車メー カーや車検場、民間整備工場 に、車両性能複合テスターやス ピード・ブレーキ検査装置など を多数納入しています。

2つめは、梱包・包装などの 物流関連機器です。新聞・印刷 関係の大手梱包機器メーカーに 企画提案したものが採用され、 昭和45年に全自動梱包機の製 造をスタートさせました。現在 は、新聞社や各種製造業、商業 施設向けに梱包機、新聞包装 機、帯掛機を開発・製造してい ます。

こうした取組みを通じて、お 客様からの開発委託や共同開発 が増えています。リベット打ち の連続作業を可能にしたオート ハンド・リベッターやエスカ レーターの車椅子乗用装置、エ ンジンのカーボンを取り除く カーボンブラスターなど数多く の製品を開発しました。

また、静岡県東部で進むファ ルマバレープロジェクトに参画 し、沼津工業技術支援センター などとの産学官連携により、大 腰筋など体の深部にある筋肉を 効果的に鍛えるトレーニング機 器を開発するなど、事業領域は 健康・医療関連分野へも拡大し ています。

創業者精神の「創る」を受け継 ぎ、業種業態を絞り込むことな く、多くのお客様との信頼関係 構築に挑戦し続けてきた結果 が、現在の当社の技術対応力に つながっていると思います。

### 高齢者や女性も使える建機で 建設業界の人手不足に対応

# ―近年の建機業界を取り巻く 環境はいかがでしょうか。

約20年前から右肩下がりを 続けてきた公共事業予算が数年 前から増加に転じ、国内建機市 場も回復傾向にありました。し かし、平成27年度には再び減 少し、主な顧客である建機レン タル会社の設備投資意欲には陰 りがみられます。

東京オリンピック関係の建設 需要が注目されていますが、全 国の工事量の2%程度と言わ れ、押し上げ効果は限定的で しょう。東日本大震災の災害復 旧工事も大型工事は一段落し、 これからは住宅建設など小規模 な工事に変わっていくので、予 算規模は縮小傾向にあります。

このように、建機業界全体は

明るい材料に乏しいのですが、 当社の製品は住宅など小さな工 事向けが多く、公共工事削減の 影響はほとんど受けませんでし た。そして、ビジネスチャンス はこれから到来すると考えてい ます。

### ----それは何故ですか。

まず、小規模な工事には小型 建機が使われることが多く、当 社にとっては需要の増加が見込 めるからです。

そして、建設業就業者数の減 少問題です。平成22年に約450 万人いた建設業就業者数が32 年には約340万人に減少すると 試算されています。併せて、高 齢化も進むため、高齢者や女 性、外国人の就業割合が増加し ていくでしょう。つまり、従来 普通に使われていた建機を扱え ない人が増えることが確実です ので、安全かつ楽に操作でき、 格好がいい建機が必要とされる はずです。

また、環境対応も重要です。 騒音、振動、排ガス、燃費な ど、環境への影響がより少ない 建機が求められるでしょう。こ の点で、当社の製品は、空圧式 と比べて格段に静かです。色は カラフルに、操作は簡単にして います。今後さらにユーザー目 線の製品開発で、チャンスをつ かみたいと思っています。

近年、お客様から「機械のメ ンテナンスができる人材がいな くなり困る」という声を多く聞



くようになりました。これは、 建設機械でも「所有から利用へ」 という流れが確実に進み、必要 な時だけレンタルするように なっているためです。建機メー カーが、メンテナンスまでトー タルでケアする時代になってき ており、今後一段とその傾向は 強まるでしょう。こうした変化 が当社にプラスとなるような仕 組みづくりをしていきたいと考 えています。

### ひとづくり・産業づくり・ 地域づくりに貢献

# -会長を務められる静岡県中 小企業団体中央会が創立60周 年ですね。

中小企業団体中央会は、中小 企業の組織化や設備の近代化、 経営の合理化などを推進してき ましたが、時代とともに役割が 変化しています。そこで創立 60周年を記念して、中央会と 組合のこれからの行動指針とし て「未来宣言」を採択しました。 「地域経済の明るい未来の実現」 をテーマに、「ひとが住み、ひ とが働き、ひとが行き交う活気 ある明るい地域」の実現のため に3つの柱を立てています。

まず、「地域産業を担う ひと づくり」です。少子高齢化や人 口流出が地方にダメージを与え る中、故郷を離れた若者に静岡 県の中小企業の魅力を伝えた り、企業と人材のマッチングを 図るなど人材確保を支援すると

ともに、後継者育成に取り組ん でいきます。

次に、「魅力あふれる 産業づ くり」です。企業組合の組織化 を通じた創業支援や、海外市場 の開拓を目指す中小企業の組織 化支援など、時代の流れを意識 した組合設立を推進します。加 えて、中小企業相互の交流・商 談機会や第1次産業との連携な ど、ビジネスマッチングの機会 創出にも取り組みます。

最後は、「暮らしやすい 地域 づくり」です。各組合では、夏 祭りなどのイベントを通じて地 域住民と組合企業との交流を 図ってきましたが、行政との防 災協定締結など緊急時の支援 や、コミュニティビジネスを通 じた日常生活の向上など、地域 貢献活動をより積極的に展開し ていきたいと思います。

# --未来宣言を実現していくた めのカギは何でしょう。

組合を構成する個々の企業に 活力があることが大前提ですの で、中央会の役割としては、傘 下の組合を通して「情報の収 集・伝達 | を行うことが重要で す。

中小企業の経営者は孤独で、 少ない情報の中で舵取りをして いますが、たくさんの情報を 持っている企業は元気がありま す。中央会は各種支援事業の周 知を図り、経営者の挑戦意欲を 喚起する役割を担うべきでしょ う。また、静岡県には多様な業

種、企業があり、情報が飛び 交っていますので、それを集約 し、生きた情報として流してい くことも重要です。

# ――最後に、大切にしている言 葉を教えてください。

私は「犠牲者を伴わない利益 追求」を経営哲学としています。 企業が存続するには常に利益を 出していく必要がありますが、 そのために犠牲者を出しては企 業の存続はありません。給与や 労働環境面で社員を犠牲にした り、協力会社にコスト低減を無 理強いする、あるいはコストを 優先するあまりお客様に満足い ただけない製品を提供するなど していては持続的な発展はな い、と肝に銘じ経営にあたって います。

当社はニッチ市場で勝負して いますので、多品種少量生産に 磨きをかけるとともに、ユー ザーの声に耳を傾け、製品開発 に活かしていけるようマーケ ティング力を強化していきたい と考えています。当社だからで きる省人化・省力化機器を開発 し、多くのお客様の笑顔を創造 していきたいですね。



聞き手 当所 常務理事 大石人士